The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	変容する身体 : ブレイクの『ジェルサレム』
Author(s)	渡部, 充
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1988, 22, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50005
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

変容する身体

——ブレイクの『ジェルサレム』——

渡部　充

William Blake (1757-1827) の難解をもってなる後期予言書三作中、最後の *Jerusalem* (1804-c. 1820) は Blake 予言書でも *The Four Zoas* (c. 1796-1807) と並ぶ大きな規模のもので、未完に終わった『四つのゾア』とは違って、全4章、計100枚の彩色版画として完成され、5組のコピーが存在している。

ジェルサレムとはサブタイトルに 'The Emanation of The Giant Albion' とあるように、ブレイク神話中、全宇宙を体内に含み、堕落＝分裂以前の人間の全一性を体現する巨人 Albion の流出＝女性的分身である。物語はこのアルビオンとジェルサレムの分裂と統合を中心として、英国と旧約聖書の世界を相互に交錯させ、地理的に二重写しにすることで成立している。またジェルサレムとは云うまでもなく、キリスト教における聖都であり、その名を冠する『ジェルサレム』を、詩人が言葉を用いてその理都想市を建設しようとした試みと解することができる。

それではここには完成された理想都市ジェルサレムの姿が描きだされているのであろうか。批評家のあるものは Los の建設する芸術の都 Golgonooza にその姿を見る。[1] しかしながら、その占める位置はそれ程重要なものではない。この小論では『ジェルサレム』に頻出する「身体」とその「変容」のイメジに焦点を当て、それらを描きだす際にブレイクが用いている技法に考察を加えることによって、いかなる意味でこれを理想都市建

設とみなすことができるのかひとつの示唆を与えたい。

1

人とその人が住む都市国家の間に、すなわち人体 Body と政体 Body Politic の間に照応関係を見た『国家』のプラトンと同様、神話的思考に深く根ざしていたブレイクにとって、人とその人を包む共同体、さらには宇宙にいたるまでが本質的に同一の身体を持つ存在として描かれる。彼の神話世界における堕落は、人＝宇宙である巨人アルビオンの同一性の喪失、さまざまなゾア達への分裂、そして変容として描かれている。さらに宇宙の堕落は彼の時代を支配していた世界観の形成、すなわちブレイクが見たところの理神論としての自然宗教の勝利と重ねられる。

そうした理神論に支配された彼の時代のロンドンは、街中を乞い歩く盲目の老人の姿で描かれている。

> I see London blind & age-bent begging thro the Streets
> Of Babylon, led by a child ; his tears run down his beard.
> The voice of Wandering Reuben ecchoes from street to street
> In all the Cities of the Nations, Paris Madrid Amsterdam.
> The Corner of Broad Street weeps ; Poland Street languishes ;
> To Great Queen Street & Lincolns Inn all is distress & woe.
> (84 : 11-16) [2)]

Beulah の娘達と呼ばれるブレイク神話における Muse 達の言葉のなかに現われるこの部分で、それまでずっと 'We' として語ってきたのに突然、'I see…' と語ってしまうところは現実のロンドンを文字通り盲目の老人として見ていたヴィジョナリーの詩人ブレイクの質を示すものであろう。Jacob の長子であり、理想都市ジェルサレムに入ることができずにさ

まよい続け、物理的世界に閉ざされて生を送る人間 Reuben ('See the normal man' という意味である) の声があらゆる街からこだまする。ここに我々はブレイク初期の *Songs of Experience* 中の 'London' からの反響を聞くことができよう。そこではロンドンの街々やテムズの流れが「特権づくめの」人間的存在として描かれ、ロンドンの通りという通りには、まるでロンドン自体が一人の売春婦であるかのように、若い売春婦の声がこだましていたのであった。

第一章の最後のアルビオンの嘆きの言葉によって、彼の体から太陽と月が逃げだし、彼が人＝宇宙からもっと縮小した制限された存在へと変容してしまったことが告げられる (24 : 6-11)。巨人アルビオンが自らの変容をその分身ジェルサレムに嘆き語るこの部分には、禁断の果実を口にして突然目が開かれ恥ずかしさに捉えられたアダムとイヴの姿を見ることができようが、われわれは堕落の原因を知らされず、ただその結果として変容してしまったゾアたちの嘆きを耳にするのである。ブレイク神話においてははじめに堕落 Fall があるわけではなく、既にどこか歴史＝物語の始まる以前に突然起こってしまった出来事として想起されるだけである。ゾアたちの変容に次ぐ変容が、争いに次ぐ争いが果てしなく感じられる程続いたあとで突然始まるブレイク的なアポカリプスについても同じことが云えよう。アポカリプスの始まりとともにブレイクの詩は突然打ち切られてしまうのだ。

その間に我々が目にし、また耳にするのは円環的に構成されたプロットではなく、さまざまな段階に色付けされ陰影を与えられてはいるものの、本質的には同じ一つのことの飽きることのない繰り返し、変容と争いと嘆きなのである。我々は、つづく二、三、四章においても繰り返されるアルビオンの嘆きを、彼の身体から逃れ去ってしまった天体の物語を聞くことになるだろう。こうした反復は、小さな円環の連続というよりはむしろ奈

落の底への無限のきりもみ降下といった印象を与える。

アルビオンばかりではない、Los や Urthona の Spectre, Jerusalem や Vala、Jesus や Mary、London や Oxford、さらには永遠の声とか Beulah の娘たちといった声だけの存在までが、次から次へと異様ではあるが結局は同じことを繰り返し、嘆き続けるのである。

> So spoke the Spectre to Albion: he is the Great Selfhood
> Satan: Worshipd as God by the Mighty Ones of the Earth
> Having a white Dot calld a Center from which branches out
> A Circle in continual gyrations; this became a Heart
> From which sprang numerous branches varying their motions
> Producing many heads, three or seven or ten, & hands & feet.
> (33 : 17-22)

『ジェルサレム』の任意のプレートを選んでみるとよい、我々はそこにこうした変容する身体のイメジを見るだろう。例えばここでは想像力ロスを抑圧し彼を絶望へと導こうとするロスのスペクターが多頭のヒドラを思わせる存在になってしまう。続く各章で他のゾアたちも手や足が蔦のように絡まりあって伸びてゆき自由を奪われた植物的存在となり、感覚をはじめとする諸器官が縮小形成され、彼らを物理的世界に閉じ込めてしまうだろう。地に根をおろし、自由を奪われ身動きできなくなってしまった植物的人間。ブレイクが同時代の人間の在りかたを捉えるうえでこのイメジがいかに中心的なものであったか、『ジェルサレム』の至る所に描き込まれている手や足が根となり、あるいは蔦となって地面やテクストの文字に絡みついている人物像に明らかである。

我々はブレイクのテクストにおける 'Body,' 'Limbs,' 'Members,' 'Veins,' 'Nerves' といった生物としての身体を思わせる言葉の頻出に驚か

される。そもそもこの『ジェルサレム』自体が一つの解剖、あるいは生体探査のメタファーで語られているのだ。[3)]

Fearing that Albion should turn his back against the Divine Vision
Los took his globe of fire to search the interiors of Albions
Bosom, in all the terrors of friendship, entering the caves
Of despair & death, to search the tempters out, walking among
Albions rocks & precipices : caves of solitude & dark despair
And saw every Minute Particular of Albion degraded & murder'd
But saw not by whom ; they were hidden within in the minute particulars
Of which they had possessd themselves ; and there they take up
The articulations of a mans soul and laughing throw it down
Into the frame, then knock it out upon the plank, & souls are bak'd
In bricks to build the pyramids of Heber & Terah.

(31 : 2-12)

『ジェルサレム』の一枚目のプレートには、右手に燃える球をもって建物のアーチ状の入口から入っていこうとする夜警の姿をしたロスが描かれている。引用の二行目にあるように、これは読者がこれから目にするのは巨人アルビオンの内臓であることを暗示するものであろう。さらに一章のアルビオンとジェルサレムのやりとりの場面では、ジェルサレムがアルビオンによる彼女の恐ろしくメランコリックな解剖を嘆いている(22 : 19-24)。

このように頻出する内臓的イメジは、ブレイクをラブレー的な中世のカーニバルの哄笑の世界に結びつけるというよりは、むしろ彼の同時代の比較解剖学、組織学の驚異的発展につなげるものであろう。[4)] ブレイクの時

代、医学的まなざしが人の身体を発見し、各組織、各器官が白日の下にさらされる。ブレイク流に云うならばそれは人体の堕落＝変容であった。これは人の魂が焼き固められ煉瓦となってピラミッドを構成する、本質的に暗い自然宗教の世界である。

2

ブレイクの世界においてゾアたちの身体はただ受動的に変容させられるばかりではない。かれらは相手のゾアの肉体を積極的に形成しようと互いに争いあう。ここでは文字通り相手の肉体を形成することが、他のゾアに対して優位に立ち、支配力を行使することになっている。Vala はアルビオンのいまひとつの女性的流出であり、ジェルサレムの影としての存在であるが（11：24-5)、そのヴェイラは自ら織りあげるヴェイルで二人を支配下に置くと、アルビオンの身体を創りあげる。

So sang she: and the Spindle turnd furious as she sang:
The Children of Jerusalem, the Souls of those who sleep
Were caught into the flax of her Distaff & in her Cloud
To weave Jerusalem a body according to her will,
A Dragon form on Zion Hills most ancient promontory.

(80：32-36)

このヴェイラはロスのスペクターと合体して両性具有の Hermaphroditus となって女性的意志 The Female Will による支配権をふるう。彼らが説くのは死への恐怖、それ以上に生に対する絶望、そして絶望への絶対的な屈伏なのである。スペクターは女（それは生物学的な男・女の対立を超えた意味での女ではあるが）の支配下にある地上の生の惨めさ、救いようのなさを語ってやまない。

The Man who respects Woman shall be despised by Woman
And deadly cunning & mean abjectness only shall enjoy them
For I will make their places of joy & love excrementitious,
Continually building, continually destroying in Family feuds.

(88 : 37-40)

こうして女性生殖器官を創り上げたスペクターに呼応するように、ヴェイラのひとつのヴァリエーションである Gwendolen は、その男性的分身 Hyle（ギリシャ語で物質ヒュレーである）の体を創るとき、その生殖器官を最後に仕上げると、それらに私欲と利己的自然道徳を与えてハイルの腰に隠す（80 : 67-76)。スペクターとヴェイラの言葉は物理的世界に閉ざされて生を送る我々に、そしてブレイクその人にとって最も脅威に満ちた説得力ある言葉である。

こうしたゾアたちの支配権をふるうための身体創造行為に対して、ブレイク神話における想像力の体現者ロスによる創造行為が対置される。ランベス書と呼ばれる初期予言書以来、堕落＝変容し続けるゾアたちにひとつの身体を与えることがロスの役割であった。彼が実際に創造し身体を与えるのは偽り Falsehood に対してである。

What shall I do! or how exist, divided from Enitharmon?
Yet why despair! I saw the finger of God go forth
Upon my Furnaces, from within the Wheels of Albions Sons:
Fixing their Systems permanent: by mathematic power
Giving a body to Falsehood that it may be cast off for ever.

(12 : 9-13)

ゾアたちに身体を与えるのは、彼らの変容を食い止め、その形を固定し、そうすることで偽りを取り除くためである。この意味で彼の創造行為は同

時に破壊であり、彼の対立者ヴェイラやスペクターの身体創造行為とはまったく正反対のものである。ロスは言う 'I must Create a System, or be enslav'd by another Mans / I will not Reason & Compare : my business is to Create.' (10 : 20-21) 出来合いの他人のシステムに捉えられてしまうことこそ創造力＝ロスの死である。ひとつのシステムの完成を目的とせず、常に別のシステムへの移行の可能性を秘めつつ創造＝破壊を繰り返すことがブレイクの捉えた創造行為の本質であった。

こうしたロスの創造行為の二重性はロスのもうひとつの創造、芸術の都ゴルゴヌーザの建設にも現われている。

> Here on the banks of the Thames, Los builded Golgonooza,
> Outside of the Gates of the Human Heart beneath Beulah
> In the midst of the rocks of the Altars of Albion. In fears
> He builded it, in rage & in fury, It is the Spiritual Fourfold
> London : continually building & continually decaying desolate!
> (53 : 15-19)

この都の建物の石は同情 Pity、煉瓦は情愛 Affections でできており、愛 Love と優しさ Kindness のエナメルをほどこされている (12 : 30-31)。それらは物理的存在を持たない常に建設の過程におかれている建物である。ロスは彼の建物を構成する言葉 Word, 労働 Work, 希望 Wish こそ失われることなく永続するのだという (13 : 59-62)。

ロスによるゴルゴヌーザ建設に対置されるのがスペクターとユリゼンによる幾何学的な建築である。彼らの建物の石は理性や論証であり、それが迷路のようなアーチとなってその中を天が回転し、永遠は鎖につながれる。石は星まで届くほど積み上げられ、建物は自然宗教となる。ヴェイラの二人の守護のケルブ、ヴォルテールとルソーは同時に顔をしかめる岩で

あり、女性的幕屋（スペクターによって創られた女性器であろう）であるベーコン、ニュートン、ロックの氷った息子たちであるとされる。

In awful pomp & gold, in all the precious unhewn stones of Eden
They build a stupendous Building on the Plain of Salisbury; with chains
Of rocks round London Stone: of Reasonings: of unhewn Demonstrations
In labyrinthine arches (Mighty Urizen the Architect) thro which
The Heavens might revolve & Eternity be bound in their chain.
Labour unparallelld! a wondrous rocky World of cruel destiny,
Rocks piled on rocks reaching the stars; stretching from pole to pole.
The Building is Natural Religion & its Altars Natural Morality,
A building of eternal death: whose proportions are eternal despair.
Here Vala stood turning the iron Spindle of destruction
From heaven to earth: howling! invisible! but not invisible
Her Two Covering Cherubs afterwards named Voltaire & Rousseau:
Two frowning Rocks: on each side of the Cove & Stone of Torture:
Frozen Sons of the feminene Tabernacle of Bacon, Newton & Locke,
For Luvah is France; the Victim of the Spectres of Albion.

(66 : 1-15)

ここでは言葉を力づくでねじあげて抽象的な理性や永遠や自然宗教といっ

たものを具体的な建物のイメジに重ねている。しかし抽象観念を擬人化し、あるいは自然物に託してうたいあげたロマン派詩人たちとは違って、これらのイメジはあくまで乾いていてザラザラとした即物的な感触をもっている。

3

『ジェルサレム』においては、このようにさまざまな意味での創造行為が繰り返されゾアたちの身体は変容し続けるのであるが、そうした一種の混沌状態にあって彼らはもうひとつ別の身体 'Divine Body' への希求を語り続ける。ゾアたちが失い、そして嘆きのなかで求めるのは想像力としての身体である (21 : 11-2 ; 24 : 23-5)。物理的な肉体としての 'Human Body' とどこに存在するのかはっきりしない想像力としての 'Divine Body' をブレイクは彼にとっての真のキリスト教を定義する際にはっきり 'Mortal Body' と 'Imaginative Body' として対立させて捉えている (77 : prose)。しかしながらロスが創造するのはこの「聖なる身体」ではなく、変容し続けるゾアたちの偽りの身体であり、彼の芸術の都は常に建設途上にあり、完成された理想都市ジェルサレムとはならないのであった。

ブレイクは 'To The Public' とタイトルされた一種の序文で、自らの技法について語り、言葉がそれ自体の物理的存在のレヴェルで対象を模倣するということを述べている (3: prose)。さきに引用したプレート66の部分を見てみよう。ここにみられるのは普通名詞、抽象名詞、神話上の、実在のあるいはブレイクの独創になる固有名詞、これら一見何の関連もないように見える名詞群の並列である。そのあいだに強引で途方もないような関連をつけていくのがブレイク、特に『ジェルサレム』に顕著な方法である。名詞ばかりではない、'dark,' 'desolate,' 'desperate,' 'dismal' といった形容詞、'destroy,' 'decay' といった動詞など無限にといっていいほど繰り

返されるdで始まる言葉の群れ。これらはまさに不透明で物質的な荒々しい感触をもって、そこ、すなわちブレイクが彫版したプレートのうえに存在している。[5] ブレイクのテクストは活字という均質的でなめらかな媒体としてでなく、それ自体の物理的存在＝身体をつよく主張し、透明になることを拒み、イラストレーションとわかちがたく結びつきあう彩色版画として存在している。

今やなぜ『ジェルサレム』の中に、ゾアたちに求められ続けた 'Divine Body' も理想都市ジェルサレムもその姿を現さないのか、明らかとなろう。理想都市、例えばひときわ壮麗にそびえたつ聖殿を中心にして碁盤目状に配置された街路、整然と立ち並ぶ建物群、木々の植込や咲き乱れる花花、噴水と小鳥たちの合唱・・・。こうしたユートピアはこの地上に存在し得ない場所ではあるが、しかしそれはある可能な場、ある権利上の存在する場をもった均質的な空間であり、陳腐なもので、我々を安心させビュウラーの眼りに誘う。[6] ブレイクのジェルサレムはこうしたユートピアとは似ても似つかない、絶えず他の次元、別の空間の侵入によって乱され、有機的な全体を構成することのない場、言葉とイメジの決して閉じることのない系列をなしている。それは「いま、ここで」と「ここではないどこか」のあいだの無限の往還運動をなしており、ある均質空間への写像を描くことの不可能な異質空間である。

無限に変容し続けるゾアたちの降下の果てに、まさに我々が『ジェルサレム』を読み終えようとする直前に、突然ブレイク的なアポカリプスが始まる。しかしそれは『四つのゾア』におけるようなヴィジョンの大饗宴といった観は呈しないだろう。『ジェルサレム』最後の詩行はあっけない程の静かさに満ちている。

All Human Forms identified, even Tree Metal Earth & Stone : all

Human Forms identified, living, going forth & returning wearied
Into the Planetary lives of Years Months Days & Hours ; reposing
And then Awaking into his Bosom in the Life of Immortality
And I head the Name of their Emanations : they are named
Jerusalem. (99 : 1-5)

こうして身元確認 Identification はおこなわれた。それはブレイクの見た暗黒の世界、自然宗教の支配する彼の時代に、それにみあった形＝身体を与えることであり、それら堕落し有限なものとなり変容を続ける生命の世界をブレイク的な Writing で模倣することである。

『ジェルサレム』には理想都市ジェルサレムは描きだされないであろう、なぜならブレイクの『ジェルサレム』それ自体がひとつの理想都市＝ブレイクの「聖なる身体」として存在しているから。ここではブレイクの Writing はひとつの身振りとしてある。それは書き得ないものを書き、思考し得ないものを思考し、存在不可能な異種空間を言葉で現出してみせようと、精一杯身振りする。[7] 先にも指摘したようにそもそもブレイクのテクストは彩色版画という、彼が彫刻刀と筆をもって創造する極めて身体的＝身振り言語的な存在であった。それは何かを描きだすための詩作＝表現ではなく、それ自体が何かを行なっている詩作＝行為としてのありかたを示している。

注

1) Damon がその代表的なものであろう。Cf. S.F. Damon, *William Blake: His Philosophy and Symbols* (1924 ; rpt. London : Dawsons, 1969), pp.433-475.

2) 『ジェルサレム』への言及は該当するプレートと行数のみを示す。なお紙数の関係で引用は相当数割愛せざるを得なかった。テクストは G. E. Bentley, Jr, ed., *William Blake's Writings* (Oxford : Oxford University Press. 1978), vol. I による。

3) 視覚表現としての『ジェルサレム』についても同様のことが云えよう。テクストの文字にはゾアたちの身体を織りなしている Fibres と同じ色である赤褐色が用いられている。Cf. Anne K. Mellor, *Blake's Human Form Divine* (California: California University Press, 1974), pp. 286–7. Morton D. Paley, *The Continuing City* (Oxford: Oxford University Press, 1983), pp. 92–3.

4) 例えば89 : 29における Scapulae や Os Humeri など、ブレイクはしばしば医学用語をその詩に用いている。また Paley によればロスの行なう身体創造は18世紀当時の公開懲罰（見せしめとしての身体刑）のパロディーになっている (Paley, p. 271)。

5) Cf. Paley, p. 64. Northrop Frye, *Fearful Symmetry* (1947; rpt. Princepon: Princeton University Press, 1969), p. 359.

6) ブレイクも少なからず影響されたであろう当時の版画本に見られるジェルサレム想像図のように (cf. Paley, pp. 136–166)。

7) ブレイクにおける崇高 The sublime とはまさにこうしたものであろう (cf. Paley, pp. 57–64)。

（大学院後期課程学生）